

## 「2025年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学研究科 修士課程2年 齊藤ゆずか

わたしは現在、現代史学専修に所属し、1980年代～90年代の台湾の原住民族運動史について研究を行っている。今回のワークショップに参加したのは、台湾の現代社会のありように関心がありフィールドトリップに関心があったこと、他分野の研究を行っている教員や学生から自分の研究について意見をもらうという経験をしたかったことが主な理由である。正直なところ英語はあまり得意ではなく不安はあったものの、英語で発表を行う機会じたいが貴重であるため参加を決めた。

渡航前の講義では、台湾や韓国など東アジアをめぐる社会学的な論点がわかり、非常に興味深かった。発表準備の段になると、修士論文の研究と関連するテーマを設定したとはいえ、並行しながら行うのは大変でもあったが、発表という形で説明してみても初めて自分の論理や理解の穴が見つかり、自分の研究にも還元できる経験になった。15分という発表時間をどのように使えばよいのか、スライドで何を見せればよいのかなど、このワークショップに参加しなければ知らなかったことばかりで、学びになった。

プログラムは全部で6日間あり、初日はオリエンテーション、2日目と3日目にワークショップとしてひとり15分の研究発表・質疑応答があり、4日目・5日目がフィールドトリップ、6日目に帰国という流れだった。フィールドトリップを行う班でワークショップもまとまって着席していたため、交流の機会が思っていたよりも多く嬉しかった。

ワークショップでは、台湾大学の学生が学部生とは思えない充実した内容の研究を行っていることに刺激を受けた。また、ソウル大学の学生たちが英語での議論に長けていて、発表の構成も聴きやすかった。社会学が専門ではないので印象にはなってしまうが、日本の社会学で中心的に扱われているテーマと、台湾や韓国におけるテーマはやや異なっていると感じられたのも面白かった。日本の学生の発表テーマが移民やジェンダーなどマイノリティの問題に着目していることが多かったのに対し、台湾の学生は政治やナショナリズムといった問題に関心が高かったり、韓国の学生は災害や建築など身近なところから問題を発見したりしている傾向があった。発表内容が面白かったということもあり、質疑応答に積極的に参加できたことはとてもよかった。自分の発表に関しては、英語で内容が伝えられたという成果もあり、質疑応答の質問があまり理解できず的を射た回答ができなかったという反省もありだったが、発表後に台湾大学の学生や先生が原住民族運動に関心をもって話しかけてくれて、役に立ちそうな文献や台湾の社会学者で関連した研究を行っている人について教えてくれた。

1日目のフィールドトリップでは、台湾の国会である立法院の見学が自身の関心とも近く面白

かった。案内してくれた議員が台湾大学の先生だと知ったときは、日本の政治と学問との距離では考えにくい事態に驚いた。しかし、台湾大学の先生方がリュックに台湾でのリコール投票に賛成することを表現したバッジをつけていたり、台湾大学の学生と平和やナショナリズムの問題について食事をしながら話したりと、台湾に行かなければ見えてこなかった部分まで踏み込んで知ることができたのは大きな成果だった。

2日目のフィールドトリップでは、ホームレスの支援団体やLGBTQのホットラインを運営している団体の方からお話を聞くことができた。ホームレスの問題は昨年台湾大学に半年間の留学を行ったときから街の様子を見て気になっていたところであり、具体的な支援の内容を知り、支援を受けていた男性が壇上で話してくださったことで理解が深まった。原住民族運動史を考えるうえで、彼らが抱えていた構造的な問題の中にあった都市部で暮らす原住民の貧困には関心があったため、自分の研究と結びつけながら話を聞くことができた。LGBTQに関しては、台湾では同性婚が認められているというポジティブな側面の印象が強いが、そこに至るまでにどのような差別があり運動があったのかというところを知ることができた。

京大から参加した学生たち同士でも、映画の感想や台湾に訪れてみて受けた印象について語り合うことができた。短い渡航期間ではあったが、その中で交流も学びもたいへん充実したものになった。ぎりぎりまで添削や発表のアドバイスを行ってくださったハイム先生、現地の学生とのつながりを作ってくださった安里先生、そしてホストとしてたくさんの準備をしてプログラムを組み立ててくださった台湾大学の教員・学生のみなさまに深く感謝したい。